

萩原智花(はぎわらともか)のアイドル奮闘記

東雲まるん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

萩原雪歩の従妹の萩原智花がトップアイドルになるまでを描いた物語

…ですが、智花以外がメインを担当することもある。そんな物語ですw

目次

夢への一歩	1
始まるアイドル生活	4
弟アイドルのお手伝い	6
SHINING ROAD	9
〈前編〉	

夢への一歩

私は、毎日『シンデレラの舞踏会』や『346プロ アイドルサマーフェス』、765プロのアーリーナライブを見ていた

それが私にとっての一番の楽しみだからだ

そして楽しみと同時に、アイドルへの憧れが1日1日。強くなっていく

私の名前は『萩原智花(はぎわらともか)』15歳の高校1年生。趣味はライブ鑑賞

私には従妹がいる。765プロでアイドルをやっている『萩原雪歩』だ

雪歩お従妹ちゃんには、もの凄い憧れを抱いている。そして羨ましいとも思ってる

お従妹ちゃんとは、稀にだが電話でお話をしたり、会ったりしている

私の好きなアイドルは、346プロの『島村卯月』ちゃん。笑顔がとにかく可愛い。見ていただけでとにかく癒される。お従妹ちゃんも勿論好きだ

そして私もアイドルになる為にオーディションを受けている。765や876、346プロのオーディションを受けているが、1回も採用されたことがない

そして今回も……

智花「はあ……また落ちちゃったかあ〜これで何回目だろ？」

私はこれで13回目の不採用通知が届いた。正直もう諦めかけている。お従妹ちゃんに頼めば入れてくれそうだが、それでは面白くない。自分の力で入りたいからだ

でもさすがにもう限界だ。これ以上受けても多分落ちるだろう

智花「次で最後にしようかな……でもここで諦めたら、お従妹ちゃんみたいなアイドルになれないからなあ……どうしよう」

そんな事を思っていたら、お母さんが私を呼んだ

お母さん「智花〜あなたにお客さんよ」

「智花「私にお客さん？」

お母さん「ええ、346プロダクションの方よ」

智花「346プロの？」

そう言うと、お母さんが346プロの方を部屋に入れた

お母さん「では、ごゆつくりどうぞ」

？「はい。ありがとうございます…。貴方が萩原智花さんですね？」

智花「え？そうですけど…。」

P「私、346プロでプロデューサーをやっているのですが、実は今日は萩原さんにお話したいことがあって来ました」

智花「346プロのプロデューサーさんですか！っでお話ってなんですか」

P「はい。先日、自宅にお届けした不採用通知の事なのですが、実は不備がありました」

智花「え？不備ですか？」

P「はい。改めて通知書をお持ちすると共に、不備がある状態での配送をしてしまった事をお詫びしたくて、本日は来ました。申し訳ありませんでした」

智花「そ、そんな謝れても…。と、とりあえず、顔を上げて下さい！」

P「そして、こちらが本当の通知書になります」

そう言って渡してくれた通知書にはこう書かれていた

346プロダクション アイドル一般選抜オーディション 結果通知書

2018—0123番 萩原智花殿

採用

目を疑った。本来は不採用と書かれている場所には『採用』と書かれていた

P「おめでとうございます。もし、346プロでアイドルをやる意

思があるのでしたら、こちらのカードを持って

後日、346プロダクションへ依頼してください。では、私はこれで。失礼します」

そう言ってプロデューサーさんは帰っていった

私はどうやら、6時間ぐらい気絶していたらしい

私の夢への一歩が、今進んだ

始まるアイドル生活

智花「ここが346プロかあゝすごく大きいよゝ」

346プロのアイドルオーディションは別の会場で行われたのでここに来るのは初めてだ

智花「でも信じられないなあゝ私がアイドルになるなんて…さてプロデューサーの待っている部屋に行かなくちゃ!!」

私が玄関ホールに入ろうとしたその時

?「遅刻にやゝ?!今日は大事なお話があるのにいゝ!大遅刻にやゝ?!このままじゃあ、Pちゃんに怒られちゃうにやゝ!!」

?「だからあれだけ夜は早く寝て明日に備えるって言ったじゃん!!みくがいつまでも寝ないで猫について語ってんだもん!!」

みく「そう言う李衣菜ちゃんだって、ロックについても凄くアツク語ってたニヤン…」

李衣菜「それはあ、そのお…そ、そんな事言ってる場合じゃないよ!!早くしないとつてウワアああ?!」

智花「ヒヤア?!」

急いで走ってきた人にぶつかってしまった

李衣菜「いてて…は!ねえ君!大丈夫?」

智花「はい。大丈夫です」

みく「李衣菜ちゃんはちゃんと前を見る必要があるニヤンね」

智花「あ、あの…もしかして『前川みく』さんと『多田李衣菜』さんですか?」

李衣菜「そうだよ。あれ?見ない顔だね。もしかして新人さん?」

智花「は、はい!私、萩原智花って言います!!」

みく「智花ちゃんニヤンね!よろしくニヤン!…ニヤ?!もうこんな時間ニヤ?!急がないと!智花ちゃん、バイバイ!ほら李衣菜ちゃん、行くよ!」

李衣菜「あ、うん。じゃあまたね!」

智花「……………すごい。今のつて…」

今のは * (Asterisk) の『前川みく』ちゃんと『多田李

衣菜』ちやんだ。2人ともシンデレラ プロジェクトのメンバーだ

智花「まさかこんな近くで見れるなんて… さすがアイドル事務所… って私も急がないと!!」

私もプロデューサーさんが待つ部屋に向かった

智花「えーっと… 『CINDERELLA PROJECT 3TH GRADER ROOM』ここかな？」

P「お待ちしていました。萩原さん。ここが萩原さんの所属するプロジェクト。『シンデレラ プロジェクト 3期生』部屋です。そしてあちらにいるのが共に活動する新人アイドルの皆さんです」

歌恋「おはようございます。私、『清澄 歌恋(きよすみ かれん)』と言います。これからよろしくお願いしますね♪」

琴楓「『皆倉 琴楓(みなくら ことほ)』。よろしくね」

茉歩心「初めまして！私『蒼井 茉歩心(あおい まほろ)』。まほろって呼んでください！」

香織「うっす！うち、『大宮 香織(おおみや かおり)』って言います！よろしくおねがいっす！」

優芽「え、えっと… 『小苗 優芽(こなえ ゆめ)』です。よ、よろしく願います」

智花「よろしく願います！私、萩原智花って言います！プロデューサーさん、ここにいる5人だけですか？」

P「いいえ。全部で10人前後を予定しています。あと3人います。3人は事務所内の見学に、残りの4人は現在スカウト中です。萩原さん。これから頑張りましょう」

智花「はい！皆さん！よろしく願います！」

一同「よろしく願います！」

こうして、私のアイドル生活が始まった

弟アイドルのお手伝い

プロデューサー「皆さん、少し集まってもらえますか？」

部署に所属してから特にこれといった事もなく、1週間が終わったそろそろ皆も仕事が欲しいと思った時、プロデューサーさんが声を掛けてきた

智花「なんですか？プロデューサーさん？」

茉歩心「もしかして、お仕事のお話ですか?！」

プロデューサー「ええ。その通りです」

香織「おお！いったいどんなお仕事なんすか!!」

プロデューサー「今回の仕事は、皆さんメインの仕事ではないのですが、バックダンサーとしてのお手伝い依頼が来ています」

香織「それはスゴイツすね!!それで、いったい誰なんですか!」

プロデューサー「今回、うちの部署から3人、『PROJECT PRINCE』所属のアイドル『御手洗 翔太（みたらい しょうた）』さんのバックダンサーをしてもらいます」

茉歩心「翔太君って・・・あの『御手洗 翔太』ですか?!そんな凄いステージのバックダンサーが出来るなんて凄いですよ!!」

歌恋「その様な盛大なステージのバックダンサーを出来るなんて嬉しい限りですね」

優芽「す… 凄く、緊張します・・・」

智花「で、プロデューサーさん。誰がバックダンサーをするんですか?」

プロデューサー「今回は、萩原さん。小苗さん。歌恋さんの3人にバックダンサーをお願いしたいと思います。御手洗さんと話し合っ
て決めました」

琴楓「おめでとう。頑張ってね」

香織「絶対にステージ見に行くから、頑張ってくださいっす!!」

茉歩心「ステージに立てないのは残念だけど、頑張ってね!応援しますから!!」

智花「はい!ありがとうございます!!歌恋ちゃん。優芽ちゃん。一

緒に頑張りましたよ!!」

優芽「う、うん。自信ないけど、頑張ります」

歌恋「お互いに良い結果になるように頑張りましたよ!!」

プロデューサー「では、これから、御手洗さんと打ち合わせがあるので3人は行きましょうか」

智花・歌恋・優芽「はい!!」

信じられない。まさか初ステージが翔太君のステージのバックダンサーなんて

翔太君は元961プロ所属のアイドルで、訳合って346プロに来たらしい

でもこんなことがあるなんて…。しかも1人じゃなく、歌恋ちゃんと優芽ちゃんも一緒だ

3人で頑張ろう。そう私は心に誓った

プロデューサー「着きました。既に御手洗さんは入っています。入りましょう」

智花・優芽・歌恋「は、はい!!」

私たちは会議室に入った

その部屋の中には一人の男子がいた

翔太「あーやつと来たね!!えーつと…。『智花』ちゃんに『歌恋』ちゃん、『優芽』ちゃんだね。よろしく!」

智花「は、はい!よろしくお願いします!お会いできて嬉しいです!!」

優芽「あ、あの…。私、失敗するかもしれないけど、精一杯頑張るので、お願いします」

歌恋「よろしくお願いしますね。私も頑張りますから」

翔太「みんな良い顔してるよ。多分初めてのステージだから緊張すると思うけど大丈夫!!何か心配になったら大きく深呼吸するといよ!」

その後、当日の打ち合わせを行い、それから少し話をして打ち合わせが終わった

翔太「じゃあ!当日よろしくね!期待してるよ!!」

「そう言うと翔太君は、会議室から出て行った」

優芽「凄いですね。翔太君。ソロのステージだから特別緊張している訳でもないのに、あんなに自分の言いたいことが言えるなんて」
歌恋「そうですね」

智花「はい。プロデューサーさん。なんで翔太君達は961プロを抜けたんですか？」

プロデューサー「自分もその件については、聞かされてないんです」
智花「そうなんですか」

あんな大企業の961プロをなんで抜けたんだろ？なんて考えながら帰ったら翔太君の一言を思い出した

翔太「冬馬クンに付いていこうと思ったからかな？冬馬クンというと、すごく楽しいし！」

やはりトップアイドルの考えてることは凄いな
とりあえず今日はもう休んで、本番当日に備えよう

本番当日……。

翔太君のソロステージのバックダンサーの私たちの結果だけ言っておこう

結果は…… 大成功で終わった

SHINING ROAD 前編

智花「え！ユニットデビューですか?!」

プロデューサー「はい。萩原さん、皆倉さん、そして蒼井さんの3人には、ユニットデビューしていただきたいと思えます」

琴楓「ど、どうして私たちが？まだ、レッスンは少ししかしていないのに」

茉歩心「でもデビューだよ！凄くない?!私たちが、ユニットでデビューするんだよ!!CDを出せるんだよ!!これってスゴイことだと思わない?!」

智花「はい！凄いです！この前、翔太君のステージを手伝ったばかりなのに...」

プロデューサー「そして、デビューに伴って、これからどんどん忙しくなります」

茉歩心「うへえ〜〜どんどん忙しくなるのか〜〜でも頑張らないと！」

プロデューサー「はい。まず、一週間後にデビューシングルの販売、その翌日にはお渡し会があり、そして次の週にはミニライブがあります」

琴楓「ミニライブ...?」

プロデューサー「はい。その日のミニライブは『湯けむりゆうれい』との合同ミニライブになるので、メインは『湯けむりゆうれい』になります」

茉歩心「え？て事は、楓さんと、幸子ちゃんと、一緒にステージに出れるって事？」

プロデューサー「そうです。そしてもう一つ。皆さんにユニット名を考えると一緒に、曲の歌詞も考えてもらいたいです」

茉歩心「ユニット名と曲の歌詞？」

智花「ユニット名を考えるのは分かりますけど、なんで曲の歌詞も考えるんですか？」

プロデューサー「実は、皆さんのイメージに合わせて曲を作るよう

に頼んでいたのですが…その…皆さんの各々のイメージが違いすぎて、歌詞が難航しているんですよ」

茉歩心「各々のイメージ…」

私も各々のイメージが違うことは、良くわかっていた

琴楓ちゃんは、落ち着いたクールな感じで、茉歩心ちゃんは、すごくポジティブだからだ

私は…よく分からないけど

プロデューサー「曲の方は、既に完成していて、後は歌詞をつけるだけなんです。

みなさんをお願いしてもよろしいでしょうか？」

茉歩心「オツケー!!任せてよ!ねえ!とももん!!ことはん!!」

琴楓「うん…って、ことはん?!」

茉歩心「だってその方が呼びやすいでしょ?!」

私は、『とももん』ってあだ名を茉歩心ちゃんに付けられちゃった。でもちよつとうれしいかも

プロデューサー「では、来週までに。よろしくお願いします」

という訳で、私たちはデビューシングルの歌詞とユニット名を考えることにした

家に集まろうにも、それぞれの家が離れているので、カフェで考えることにした…